

大交流時代到来に寄せて^④

21世紀・私流おつきあいあれ、これ漫談

ミスター・ザルツブルク

〈冬の夜のとりとめのない話〉

From 15 to 25 ,she is like Africa:half virgin, half explored.

From 25 to 35,she is like Asir:hot,torrid and mysterious.

From 35to 45,she is like America:streamlined,efficient, and co-operative.

From 45 to 55,she is like Europe:ruined,devastated, but still good.

From 56,she is like Australia:Everybody knows where sh is,

but no -body wants to go down there.

そしてタイトルがGeographical Ages of Womenとなっている。

大略するに、つぎの。

15歳から25歳までの女性は、

アフリカ大陸である。半分処女地で、半分は破裂済みである。

25歳から35歳までの女性は、アジア大陸である。熱く、乾ききりかつ神秘的である。

35歳から45歳までの女性は、アメリカ大陸である。最新の

誰もが知っているものの、そこ

ここに行きたがる人はだれもない。

原典は、研究社刊奥平光著

『A wanderer in Europe - ヨーロッパの漫歩』の181頁に収録されているもの。初版昭和33年

5月25日。

研究社の『時事英語研究誌

上に連載されたものの佳編を改めて吟味し加筆され単行本

として提供された一環のものだった。

面白いことに私は当時新聞

社の大阪支社に勤務中であつた(大阪に約15年在勤)。

そして言う所のその当時、

飛ぶ鳥をおとすがごとき勢いのあつた、十大貿易商社を担

当していた。

十大貿易商社とは、伊藤忠・

兼松江商・東洋棉花・丸紅飯

田・日綿実業・日商岩井・安

宅産業・住友商事の大阪8社

と、三井物産・三菱商事の東

京2社の事である。

著者の奥平光氏は、知る人

ぞ知る兼松江商に勤める、パ

リパリの商社マンで、激務の

かたわら、才能ある英語を駆

使用する人だった。



私は嘗てあつた、北浜(大

阪証券取引所のある処)のト

ツパン・セールズで、前述著

書を求め(昭和33年6月25日)

通読した。

それをチャンスに広報や総

務に関係してなかつた奥平氏

に面会を求め以来時たまお会

いし高説を聞くこともあつた。

貿易商社のひしめく、本町

界隈の、御周知の向きも多い、

「美々卯」のそばにあつた、ピ

ーフ・ステークス屋でステーキ

を御馳走になったりした事も

ある。

奥平さんが紹介された、地

理的(大陸別)女性特性は氏

の言葉を借りて言うところな

る……。

当時の大阪貿易協会の専務

理事をしていた浜野恭平氏が

ある会台で披露されたものを

盗み取りし奥平さんはコッソ

リ身につけ欧州に持ち出した

つまり密輸し、とにかく再輸

出(この話は舶来らしい!!)し

スイスで売出し、一夕のビー

ル代を稼いだ。こういう関税

のかからぬ貿易もある!!?と

181頁にかいている。

後日談として浜野氏にこの

話を伝授したのは伊藤忠の加

藤正氏と判明したと、実に至

れり尽くせりのオチ!!まで付

いている。

こつこつ無為替輸入はビュ

ーティフルの一語につきると

いわざるを得ない。

時は巡り、この話に類する

記事とどうか文章にお目に掛

かることになった。

私の社の大先輩で、大変可

愛がって頂いているA羽とい

う方がいる。A羽氏とは、今

でも月1の日本酒を飲む会で

お会いし、歓談する仲である。

氏が先年出した出版物の60

頁から61頁に掛けてそれは掲

載されている。

18歳から22歳の女性は、アフリカ大陸である。半分処女地で、半分探検済みである。23歳から30歳までの女性は、アジア大陸である。どちらも暗黒と神秘に包まれている。31歳から40歳までの女性は、ヨーロッパ大陸である。もはや探検の余地がほとんどない。41歳から上の女性は、シベリア大陸である。そこはみんな知っている。しかし、だれも行きたがらない。氏は引用文章と断りを入れられていて、出典は週刊朝日の川村二郎編集長が「人間、どんなときでも笑いを忘れてはいけないよ」との前置きつきで、知り合いのアメリカ人から教わったジョークを紹介しているのに目が止まった。と明記して披露されているもの。

＜ スペシャル・オリンピックピックス ＞

その筋の方は御存知だが、多くの方が知らないオリンピックピックスがある。「スペシャル・オリンピックピックス」とは知的障害のある人達を対象とした、国際的なスポーツ活動組織として世界150カ国が参加している。幅広い年代層のボランティアのサポートの下で行うので、「オリンピックピックス」という。このSOが2005(平成17)年日本長野県で、第8回冬季世

な知っている。しかし、だれも行きたがらない。氏は引用文章と断りを入れられていて、出典は週刊朝日の川村二郎編集長が「人間、どんなときでも笑いを忘れてはいけないよ」との前置きつきで、知り合いのアメリカ人から教わったジョークを紹介しているのに目が止まった。と明記して披露されているもの。

L・FAX〇九二741〇七九九

番である。

＜ 世界に渦巻くものすごい情報 ＞

現実の世界は、実に大量の情報で日夜、流れまくなっているといつてよい。各国の動き、例えばロシア3月の大統領選、フィリピン5月、アメリカ11月のそれ、等を筆頭に南米、アフリカ、EU、アジア、オセアニアや南極大陸の動き、空を見れば、各国の宇宙への動き。

情報の世界中で私がこの頃、感心するもの最たるものの一つに「大地震の情報がある。先刻お気付きの向きは多いと思っけれど、5年程前!?迄は、最近のように頻度多く、新聞にも、テレビにも政府公報にも、いわゆる大地震に対するキメの細かい情報の流れは無かった。

1963(昭和38)年、あのケネディ大統領の妹のユニスケネディ・シュライバーさんの邸宅での交歓会から芽生えたといわれる。日本では、この趣旨と目的にいち早く賛同活動を始めたのが熊本だという。そういう訳でスペシャル・オリンピックピックスの日本理事長は細川元首相夫人の細川佳代子さんである。

ところが私が指摘するまでもなくこの2〜3年の大地震

＜ 国際交流的視点でマスメディア ＞

新聞紙上での国際関係の記事や、電波媒体上での、各国食へ歩き、紀行、横断・縦断紀行や訪問番組の増量。殊にNHKの、旅、トレッキング紀行、美を求めての美

関係のニュースその他政府告知は、或る意味では異常でさえある。ところが今やそれがスナリ聞かれている状況に皆不思議を感じていない!?。私は国の情報操作!?の巧みさに舌を巻いている一人である。大地震のこと丈に、この事は良い流れの中にあると思つた。他の事情に関しての、このような情報による一人一人に対する困い込みは、常にその事案毎に受け手の一般国民は自分自身のメジャーをもって一つ一つの情報の流れを受け止め、受け入れる否受け入れないを決める重大な課題・問題を今後の個人が持たねばならないと思つた。そのような総和がこの国をより良くする。



ている。

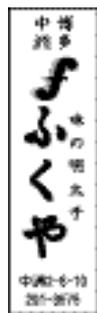
歴史を振り返って見せる、学ばせる、再考させる、歴史上の事件、人物、問題を探り上げる番組と、プロジェクトXに見るつい先頃あった先人の苦勞の物語等は、前述した「〇〇は動いた」等で国民一般を大いに啓発していると思っておる一人である。

そしてまた、政治の世界でも、有為な政治家達が、それこそ少しずつながら、その昔の日本のこし方の歴史の一端に言及し、いまあるべき、政治の方向性の一つに「何かなすべき」ものに資する思いを吐露し始めている流れは、私としては好ましい「何か」だとして、心からのオマージュ(賛意)を呈したい。

多言するまでもなく、国は長い長い年月の間に幾多の人の心の血を注ぎ、積み上げて成り立っている。

向後、数々の困難、難題に遭遇するにしても、それが仮に、他国を見ても、もはや、筋書きも、教科書もない事であって、心を静め過去の歴史

史をひもどく時、再復習する時、必ずや、解決への「ヒント」があると思う一人である。歴史そして国内外のそれは、自ずからは語る事はないけれど、我々に「何か」を示してくれている。



但し、それを読み取る、普段からの一人一人の受け皿としての資格、能力は問われねばなるまい。

いずれにしても、サースにしても、鳥インフルエンザにしても、日本に寄港する船から排出する微生物の問題にしても、砂塵にしても、航空機で持ち込まれる生物にしても、各国民の出入国にしても、そして世界的なテロの恐怖にしても、はたまた輸出入されるおびただしい食品、木材などにおいても、今やすべて、この21世紀は大交流、大合作の中で各国民は生活をせざるをえなくなっている。

まさに、世界はこれ一家庭一大家族のものにたち至って

いる現実を、忘れてはいけな

い。それ丈に日本のマスメディアの前述した諸々の記事、番組等の今後更なる、いい意味での拡大強化を願うもの一人である。

等しく言われる、他国に後れを採るまいぞという、文盲に、また他国を自国を充分熟知しつつ、それ以上の研究努力を傾注して熟知する方向性の確立が、この国をより強くする道であると思つた。

◇話のくずかごととして◇

◎ 曜日は色分けされている。

我々日本人は、生年月日は、当然のように、例えば1933(昭和8)年8月28日という風に憶え、聞かれれば、そう答える。

ところがタイ国では、各曜日は「色」が決まっている。つまりこのついでである。

Sunday = Red 日曜・赤色

Monday = Yellow 月曜

・黄色

Tuesday = Pink 火曜・

桃色

Wednesday = Green 水曜・緑色

Thursday = Orange 木曜・オレンジ色、だいたい

色

Friday = Blue 金曜・青色

Saturday = Purple 土曜・紫色

・紫色

従ってタイ国の人達に、生年月日を聞くと私は1933(昭和8)年8月28日〇〇色の生まれですという答えが返って来ることになる。

◎有森裕子さん、走る前の食事

走る前の食事は腹が張って来る食物は、絶対摂らない。梅ぼし入り海苔巻きでないお握り2個、に餅2個入り味噌汁。腹の張らない!! ジュース小コップ一杯。とカステラ

二分の一本。を食するという。2003(平成15)年11月16日(土)ホテルニューオータニ博多での講演会から。

新和風を遊ぶ旨酒。

舞吟醸

清酒・500ml



酒の心を提供する

株式会社

いそのさわ